2023年の大好評企画「Jan Bach トークライブ!!」第2弾

# J.S. Bach トークライブ!!

ミュージックスクール「ダ・カーポ」地下イベントスペース

2025 年 7 月 12 日（土） 開場 16：30 開演 17：00

［第1部］ **J.S Bach 演奏のポイント①** 60分間

| | |
|---|---|
| 17:00 | **無伴奏フルートのためのパルティータBWV1013 を語り吹く**<br>1. 小久保まい<br>2. 大山智<br>3. 齋藤充 |
| 18:00 | 休憩 15分 |

［第2部］ **レクチャーコンサート** 95分間

| | |
|---|---|
| 18:15 | E.Ewazen:Sonata for Euphonium and Piano (齋藤) |
| 18:45 | 伊藤康英:ユーフォニアムとピアノのためのソナタ (大山) |
| 19:15 | K.Jenkins:Euphonium Concerto 全楽章 (小久保) |
| 19:50 | 終演予定 |

［出演］ Euphonium 大山智、齋藤充、小久保まい　Piano 佐藤友美

主催：Jan Bach トークライブ!!実行委員会
協賛：株式会社グローバル、管楽器専門店 ダク
後援：日本ユーフォニアム・テューバ協会

## J.S. Bachトークライブ!! エッセイ （小久保まい）

**【J.S.Bach / 無伴奏フルートの為のパルティータについて 】**

「自分にとって苦手で向いてないと思う作品との向き合い方」
嫌いだけどとりあえず譜読み、嫌いだけどネット情報で良いからなんでも調べてみる！
一番効果的だったのはバッハが好き＆得意な人に話を聞いたり、バッハ好きと思われる人のウェブサイトを見た・演奏を聞いたりしたことでした。

バッハお好きな方々へのアンケート 抜粋

**①バッハの作品を演奏するとき、他の作品と比べて気を付けていることはありますか？**

・演奏する場合はタンギングや音符の長さ（特に短い音符）は長めに演奏するようにしています。あと楽譜に強弱が書いていませんが、エコーの部分は強弱したり曲の雰囲気によって歌ったり（ビブラートは控えめ）するようにしています。（宮本）
・バッハだから特別何かを意識するということはありません（井上）
・どの曲でも和声分析から始めます。研究は一生かかっても終わらない、それがバッハの面白さ！（丸田）

**②バッハの作品でご自身の楽器のために書かれていない作品を演奏する際、何を気を付けていますか？**

・演奏家の変なエゴやチャレンジ精神が出ないようにしています（田村）
・オリジナルに囚われない、こだわりすぎない（井上）

**③参考にした資料や演奏、尊敬する人、応援メッセージなど！**

・固定概念に囚われず、柔軟な視点と発想で楽譜と対話してみてください！（丸田）
・ゴルトベルク変奏曲 シトコヴェスキー編の弦楽合奏版のCD、あとNadapremというリトアニアの音楽家（バンスーリというインドの民族楽器の笛やヴィオラ、鍵盤など多様に扱う）の「Bach in India」と題されたプロジェクト YouTubeで聴けてめちゃくちゃ自由に伸び伸びと喜び溢れる演奏をしていて感銘を受けた。（田村）

アンケート全文はこちらから

**アンケートご協力の方々**：

丸田悠太さん(東京佼成W.O.フルート奏者)
宮本弦さん(名古屋フィルハーモニー交響楽団 首席トランペット奏者)
田村真寛さん(サックス奏者)
井上圭さん（愛知県立芸術大学教授 トランペット奏者）

D.チャイルズ氏への
Jenkins インタビューも！

なにもバッハの専門家にならなくていい（と諦め）とにかく良い音と良い流れ、相手が不快にならない演奏を目指します！

**【コンクールを受けた後、いま感じること】（小久保）**

「準備の力と本番の力を見られていた気がする」
コンクールの課題曲発表から当日までの期間は皆同じ、そして皆、同じ場所、同じ緊張のある空間で演奏します。賞歴は、ちゃんと期日までに準備して緊張の中でも良い演奏ができる人なんだろうという保証で、たとえばオーケストラの仕事を頼む側が「この人なら大丈夫だろう」と思ってくださり仕事のチャンスが広がるんだなと今なら思います。しかし、受賞したからと言って永遠の仕事の保証では無く、仕事を頂けても上手くいかなかったり失敗したりして次には繋がらないことも多々ありました。賞歴は起爆剤であって、次の仕事に繋げる為には結局、毎回の演奏や準備に対して真摯に向き合う事が大切でした。

さらに、(前回のJan Bach トークライブでも話したのですが)日本管打楽器コンクールは「入社試験」みたいなものだと思うのはどうでしょう？すでに流れている音楽社会の日本支社ユーフォニアム課の入社試験と思ってみてください。すでにある流れに即参加できるか出来ないかの判断。だから、このコンクールだめだったからと言って演奏活動ができないわけではないです。でも、日本の大手企業ですから、入社を目指すのは大切！その為には是非、対策と準備、入社試験に合格された方にどんどん話を聞いてみてください！

最後に、コンクールに感謝していることは、作品をたくさん知れたことです。
怠惰で無知な自分が人並みに作品数を把握しているのはコンクールのおかげです。

## 小久保まい KOKUBO, Mai（Euphonium）

静岡県出身。浜松市立高校、国立音楽大学器楽科卒業後、渡米。
ノーステキサス大学大学院を修了。2012年 日本管打楽器コンクール最高位、2009年レオナルド・ファルコーニ国際コンクール 第3位を受賞。
ITEC 2023 (国際テューバ・ユーフォニアム大会) にてソロユーフォニアム Artist 部門の審査員長を務めた。レオナルド・ファルコーニ国際コンクール 2023、米国陸軍バンドテューバ・ユーフォニアムワークショップ2024、ThaiTEC 2025 ゲストアーティスト。
これまでにブライアン・ボーマン博士、三浦徹、露木薫の各氏に師事。
音楽表現法を保科洋氏に師事。
現在、愛知県立芸術大学、洗足学園音楽大学、沖縄県立芸術大学、浜松学芸高校、浜松江之島高校、甲斐清和高校、常葉大学附属橘高校など各非常勤講師。

## J.S. Bachトークライブ!! エッセイ （大山智）

### 【J.S.Bach / 無伴奏フルートの為のパルティータについて 】

ありきたりですが先ずは作品（または作曲家）を好きになることです。
しかし、いきなり好きになる必要はありません。仮に第一印象が最悪でも、少しずつ良さを発見していってください。そうすることによって「あなたこんな良いところもあるのね」など段々と掘り下げていく欲求も生まれてくると思います。いわば忍耐が必要な恋愛のようなものです！(え？)
J.S.バッハ(以下バッハ)という作曲家（の作品）は大学受験のためにピアノを習い始めた高校生の時は弾くのが難しく、音楽的素養も低いため全く面白くも感じなくて本当に大嫌いでした。
当時、私の中でバッハといえば嘉門達夫さんが替え歌で発表していた「鼻から牛乳」でバッハのトッカータとフーガニ短調BWV565の冒頭のフレーズ に「チャラリ～鼻から牛乳～♪」という歌詞をつけていたのが有名でした…。
そのトッカータとフーガが何と高校三年生の時のコンクール自由曲になったのです。嫌いだなぁと思っていたバッハ作品を半年位かけて死に物狂いで練習をした結果なのかは分かりませんが、あら不思議なことにバッハ作品が好きになってきていました。
その後、大学生になると定番の無伴奏チェロ組曲に触れました。最初は「こんなの吹けるか！」と投げだしそうになりましたが、師匠の稲川榮一先生から沢山のこだわりやノウハウを教えていただきまして、そのお陰で私のバッハ作品の演奏に対するイメージが少しずつ出来上がっていきましたが、それでもまだまだ表面的なものでどうにか型を真似しているような状態だったように思います。
その後もコンクールやリサイタルでバッハ作品を演奏する機会があり、その度に色々と試行錯誤をしていくうちに細かな部分まで目を向けて演奏が出来るようになってきて、自分の意志である程度自由に演奏できるようになってきたと同時に「バッハって良いかも…」と思えるようになってきました。
どの作品も自分の素が見えてしまいそうなものばかりでこれからも研究はつきませんし、
専門家の方が聴いたら「けちょんけちょん」にされてしまうかもしれませんが、本日は
今私の考えているバッハの演奏をお聴きいただけたらと思います。

### 大山智 OYAMA, Satoshi（Euphonium）

埼玉県出身。県立伊奈学園総合高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。2002年第4回別府アルゲリッチ音楽祭にオーケストラメンバーとして出演。
2009年G.リゲティのオペラ「ル・グラン・マカーブル」の日本初演に、バストランペット奏者として出演。同年、第26回日本管打楽器コンクールユーフォニアム部門にて第4位を受賞。現在は吹奏楽やオーケストラへの客演のほか様々なレコーディングに参加している。ユーフォニアムを池田勇人、佐藤信之、稲川榮一、外囿祥一郎の各氏に師事。Vivid Brass Tokyo バリトン奏者、現代奏造 Tokyo 各メンバー。尚美ミュージックカレッジ専門学校専任講師、ミュージックスクール「ダ・カーポ」講師。

**【コンクールを受けた後、いま感じること】（大山）**

1回ダメだと基本的には3年後になる訳で、正直なところまたあの大変な思いをしなくてはいけないのかという負の感情に取り巻かれていました。
しかし当時のことを思い返すと様々な面で足りていなかったなというのが率直なところですし、回を重ねるごとに自分の力の底上げができており、必要な期間だったんだなと感じています。

演奏の現場では的確な技術、音楽性、アンサンブルの力が試されます。コンクールはこういった力(特に技術や音楽性)を養い、緊張の中でも自分をコントロールして力を発揮するということを体験できた大変貴重な時間でした。
ただ、技術や音楽性を高められていても、聴いている人から「共感」を得られないと独りよがりな演奏になってしまうでしょう。当時の私は「上手く演奏できれば良いだろう」という思いの方が強く人と音楽を共有する、共感を得るというポイントが全くと言って良いほど抜けていたと思います。
この「共感」には音色、音楽、立ち居振る舞いなど沢山のポイントがあると思います。(それも聴く人によってポイントは様々)
万人に受け入れられることは難しいと思いますが、ぜひ「共感」という点も頭の片隅に入れて今後も取り組んでいただけたらと思います。

## 佐藤友美 SATOU, Yumi (Piano)

北海道札幌市出身。桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒業。
アンサンブルピアニストとしてコンサートやレコーディング、FM放送など、多方面で数多くの国内外のアーティストと共演を重ねている。1997～2004年桐朋学園大学嘱託演奏員。
2002・2010年済州島国際コンクール（ユーフォニアム部門）2007・2008年浜松国際管楽器アカデミー＆フェスティバル、2014年ジャック・ランスロ国際クラリネット・コンクールJapan2014公式ピアニストを務める。

## J.S. Bachトークライブ !! エッセイ （齋藤充）

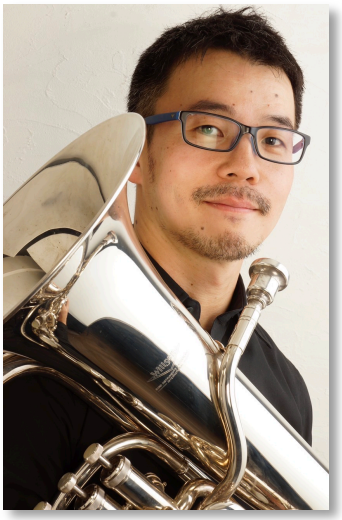
### 【J.S.Bach / 無伴奏フルートの為のパルティータについて 】

前々回の管打楽器コンクールで審査員を務めさせていただいた時、私はひっそりとこのパルティータを一次審査の課題として推していた。その後、トロンボーン部門での一次審査にバッハの無伴奏チェロ組曲が、そして前回のユーフォニアム部門ではテレマンのファンタジーが課題となったり、一次審査からバロック音楽で技術や音楽性、センスなどを見る傾向が続いているようである。

私は2度、管打楽器コンクールを受けている。1回目は大学1年生の時で2次審査でバッハのチェロ組曲第3番が、2回目は大学４年生の時で2次審査でバッハのヴィオラ・ダ・ガンバソナタ第3番が課題となっていた。ちなみに、私がファルコーニコンクールで第一位になった時もバッハの無伴奏チェロ組曲第2番が課題曲となっており、私としてはバッハをコンクールで演奏するのはやりがいのあることだと思っている。

最近の私がバッハを仕上げる際、陶芸家のように一度作った作品を一旦壊して、そして新たなものを作り続けていくようなことを心がけている。そのようなことをすることにより、多角的な視点を持って最終作品を作ることができるのではないかと思っている。コンクールが近づくにつれて、一つのことや些細なことに固執してしまい、本質を見失うことが多々あるように感じている。そうならないためにも、一度壊す勇樹を持ってほしいものである。たとえ一度壊したとしても、それまでに積み上げた経験は着実に自分の実力となっているはずなので。

本番では、演奏環境も違えば、精神状態も大きく異なる。一つの答えしか持っていない演奏だと、本番の時に起こりうる予期せぬことに対応できにくくなるのではないのだろうか。留学時代にボーマン先生から「Communicate with audience」と言われていた。その場その場の環境に応じたベストの演奏ができるように、演奏の本番までに多くの経験を積んでほしいと願っている。たとえ良くない経験でも、それらは着実に自分の糧となるはずなので。



### 齋藤充 SAITO, Mitsuru (Euphonium)

国立音楽大学卒業、ミシガン大学大学院修士課程、ノーステキサス大学大学院博士課程修了。日本管打楽器コンクール、フィリップ・ジョーンズ国際コンクール、レオナルド・ファルコーニ国際コンクールにおいて第1位。NHK-FMリサイタル、東京オペラシティ主催のリサイタルシリーズB→C、国際テューバ・ユーフォニアムカンファレンス、米国陸軍バンドテューバ・ユーフォニアムワークショップ等に出演。

B-Musicより２枚のエチュードCD、音楽之友社より『もっと音楽が好きになる 上達の基本 ユーフォニアム編』を出版。現在、侍Brass、ズーラシアンブラスメンバー。国立音楽大学、洗足学園音楽大学、東邦音楽大学、昭和音楽大学、尚美ミュージックカレッジ専門学校各非常勤講師。ミュージックスクール「ダ・カーポ」講師。

**【コンクールを受けた後、いま感じること】（齋藤）**

今振り返ると、私がコンクールを受けていた頃は先生からご指導・ご指摘いただいたことをお言葉通りに修正して本番に挑んでいたように思う。当時から「ユーフォニアムのコンクールは暗譜大会・ノーミス大会」と言われていた。その頃の私は、その意味がよくわかっていなかった。

幸いにも、コロナ禍で時間ができた時に、いろいろな本を読んだり、さまざまなジャンルの曲に接したり、専門外の勉強をしたり、考え直したりする時間を取ることができた。それらの経験により、よい物にはその影に多くの文化背景を含んでいることをなんとなく実感できた。

私が留学中に「Mitsuru plays like a machine!」と言われていた。これはよい意味も悪い意味も含まれていることと思う。当時の私の演奏は技術的には音を追えていても、演奏に文化や歴史的背景を含んでいなかっただろうし、そんなこともきちんと考えていなかったのは事実である。

本日演奏予定のEwazenのSonataは、アメリカらしい要素を多く含んでいるように感じられる。私は彼の演奏や話も実際にライブで耳にしたことがある。留学中にアメリカで経験したこと、それらを今どのように感じて、自分の糧にしているのかなどを本日お話しできればと思う。

そしてBachの演奏に関しても、単なる機械的なノーミス演奏になってしまってはもったいない。バッハだからこそ、自分の全てが晒されることだと思う。そのためには、よい音楽、よい芸術、そして様々な文化に触れる必要がある。これから管打楽器コンクールまで数週間しかないのであるが、単に練習するだけでなく、きちんと文化に根差した音楽を目指してみてはいかがだろうか。

皆さん、自分なりの人生経験を自らの演奏曲に投影してほしいと願うばかりである。コンクールが「暗譜・ノーミス大会」から「人間性・芸術性コンクール」になることを願って。

Jan Bachトークライブ!! (2023年7月1日開催) プログラム →
エッセイ「やってよかったコンクール対策・失敗談」など

Willson

BAND INSTRUMENTS SWITZERLAND INTERNATIONAL
EUPHONIUM

# 世界を魅了する 豊かな響き
## ウィルソン ユーフォニアム ——

プレーヤーが楽器に対してパーフェクトな満足と信頼を持つのは大変まれなことです。
しかしウィルソンTA2900モデルは発売以来、世界各国のユーフォニアムソリストたちが絶賛し、
その名前はいち早く世界に広まりました。
アルプスと湖、そして美しく静かな町並みと恵まれた自然の中で、
少数精鋭のクラフトマンが長年の製作経験を生かし１本１本作り上げた名品は、
まさにスイスの自然が育んだ音色の美学と言えるでしょう。

～ウィルソン アーティスト～

齋藤 充
Mitsuru Saito
[使用楽器]
TA2900BS-T

大山 智
Satoshi Oyama
[使用楽器]
TA2900BS

小久保まい
Mai Kokubo
[使用楽器]
TA2900BS-T

NEW
⇦ Eastman-Willson
カタログはこちら

⇦ カタログはこちら

発売元 株式会社グローバル® 〒169-0073 東京都新宿区百人町2-17-7 TEL 03-5389-5111 FAX 03-3367-4810 http://www global-inst co jp